

図 5 血球・血漿分離、血漿秤量遂行の様子

以上のような血球・血漿分離、血漿秤量機構の 場合、最大回転数は R2 であり、これは細管流路 を通過できる程度の遠心力が印加できる回転数 でよく、また高い加速度は必要としないので、以 前のチップの場合のように高性能のモーターは 必要としない。

その他の以前のチップの問題点、第1の試液 A とだ2の試液Bをチップへと注入するタイミング は、同じく第1のチップ回転前と同一にできるよ う、チップレイアウトを行い、またチップの厚み は試液収容槽や同秤量層の形状を改善すること で、約 8mm まで低減(以前は約 13mm)した。 以上のような改良を施したチップを図6に示すよ うに作製し、評価を行った。

#### (倫理面への配慮)

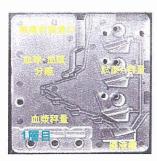
本申請研究の初期特性確立への実 施は物質・材料研究機構で行われる。 本機構では人血の採取、採血具など について外部の有識者を含む倫理 委員会が設立されておりその厳格 な規定に基づいて研究を進める。動 物実験にあたっては、動物の愛護お よび管理に関する法律(昭和48年 法律第 105 号) ならび実験動物の 飼養及び保管等に関する法律(昭和 55 年総理府告示第6号)を遵守す る。前臨床実験にあたっては、各研 究機関のガイドラインに沿った計 画を倫理委員会で検討、承認を得た 後に、書面でのインフォームド・コ

ンセントを確認する。

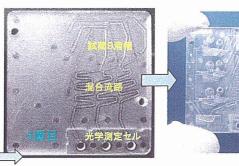
#### C. 研究結果

## C.1 血球血漿分離と血漿秤量

まず、図6に示したチップの第1層に導入した 血液を、血球と血漿に分離し、なおかつこの分離 した血漿を3つに分割秤量することができるかど うかを確認した。図 7(i)に示すように、採血モジ ュールに約6μ0の血液を静脈より採取して、これ をチップに装着し、まず、チップを図中の回転軸 C を中心に 1500rpm で回転させ、採血モジュー ルから、分離流路へと血液を移動させる。このと き血液はキャピラリバルブ (細管流路) を通過で きない (同図(ii))。このまま 2 分間チップを回転







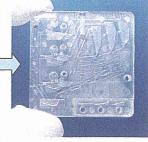


図6 改良チップの構造。

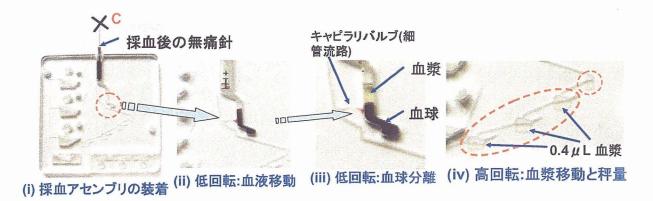


図7 血球・血漿分離、血漿秤量遂行の様子

させて、血球・血漿分離を進行させた後(同図(iii))、 チップの回転数を 3000rpm として印加遠心力を 増加させ、分離した血漿成分をキャピラリバルブ を通過させ、下流の血漿秤量層を満たし、血漿を 秤量する。(同図(iv)) 以上の様に、血球・血漿分 離、血漿秤量が遂行できていることを確認した。 C.2 試薬等の移送の様子

チップ回転時に生起する遠心力により、試薬や血液の移動の様子を図8に示す。まず同図(a)に示すように試液AとBを同時にチップに注入する。観察を容易にするためにここでは色素溶液を用

いている。また同時に血液を模し、赤色色素溶液も採血モジュール導入口から注入している。以前のチップでは、この時点では試液 A のみ注入しており、B は後から注入していたが改良型の本チップではこのように同時に注入するようにした。次に同図(b)に示すように X の回転中心にしてチップを回転させ、試液 A ならびに B をそれぞれ秤量する。また同時に血液も血球・血漿分離と血漿の秤量を行っている。次に同図(c)に示すようにチップを 90 度回転させ、図中の X を中心軸としてチップを回転させる。すると秤量した血漿と試液

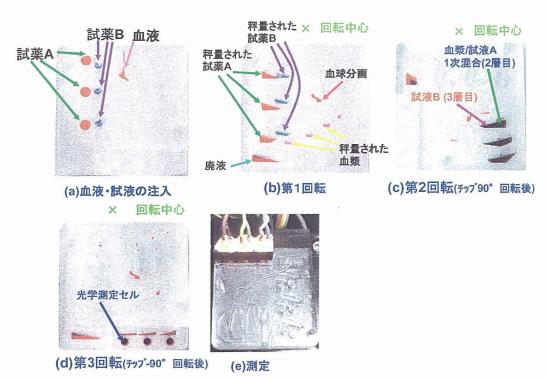
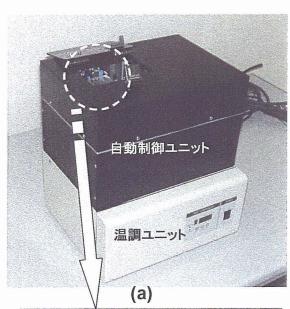


図8 チップ内での試液等の移送の様子

Aがそれぞれの一次混合槽で混合される。本混合槽と完全に重畳しているために観察しにくいが、下層には試液 Bが移送されてきている。そして再度チップを・90 度回転させて、同図(d)の X を中心軸として回転させると、(血漿+試液 A) と試液 Bが混合流路を経て、均質に混合されて光学測定セルへと移送される。混合流路については昨年度報告したような方式を踏襲している。そしてこのときの特定波長の光の吸収強度を同図(e)のように吸光度測定により求め、これを濃度に換算する。以上のようにして試液や血液、血漿の移送、秤量、混合などを遂行できることを確認した。

## C.3 自動計測装置

図8に示したような、チップの自転回転、公転 回転、温調、吸光度測定などを自動的に行う装置 を作製して評価を行っている。(図9) 本装置のチ





(b)

図 9 自動計測装置

ップをマウントするステージ部など若干の改良 箇所があるが、概ね良好に動作している。長時間 の耐久試験などは今後の課題である。

#### C.43項目測定例

中性脂肪、総コレステロール、HDL コレステロールの血中脂質 3 項目を測定した例を示す。図 10 のように無痛針採血モジュールを用い、血液を約  $6\mu$  L 採取し、この分析をチップを用いて行った。この被験者の平成 18 年 6 月 8 日の定期健康診断時の測定値は表 1 に示す通りで、特に中性脂肪は、許容値が  $50\sim149 \text{mg/dL}$  に対して 281 mg/dL と許容値を逸脱し高値となっている点が特徴である。実際、この方は高脂血症と医師に診断されている。本チップでの検査は平成 18 年 10 月 28 日に行い、結果は図 11 に示すように総



図10 採血の様子

表 1 定期健康診断時の測定値

総コレステロール	150-	219	233	В
中性脂肪	50-	149	281	В
HDLコレステロール	40-	80	67	A

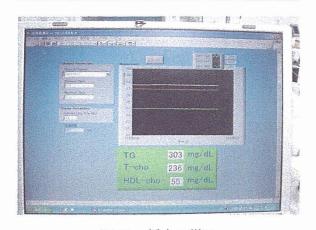


図11 採血の様子

コレステロール 236mg/dL、中性脂肪 303mg/dL、HDL コレステロール 55mg/dL であり、やはり定期健康診断のときと同様に中性脂肪が特に高値であることが特徴となっており、符合している。このようなチップの評価は、同一検体を従来の大型分析装置とチップを用い測定し、その結果を比較してチップの評価を行う予定である。

#### D. 健康危険情報

特に無し。

#### E. 研究発表

#### 1. 論文発表

R. Ogawa, H. Ogawa, A. Oki, S. Hashioka, Y. Horiike, "Fabrication of nano-pillar chips by a plasma etching technique for fast DNA separation" Thin Solid Films 515 (2007) pp.5167–5171.

#### 2. 学会発表

小川洋輝、長井政雄、堀池靖浩"微量血液分析へルスケアチップの開発"第45回日本生体医工学会大会2006年5月

#### 3. 解説

堀池靖浩、甲田裕子、小川洋輝、長井政雄、 "無痛針による微量採血分析から在宅で健 康診断できるヘルスケアチップの開発"、臨 床検査、(2006) **50**、pp.1557-1565.

#### F. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む。)

1. 特許出願なし。

2. 実用新案登録

なし。

3. その他

なし。

## III. 研究成果の刊行に関する一覧表 書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の 編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
堀池靖浩 宮原裕二	バイオチップとバイ オセンサー	高分子学会	高分子先端材料 On Point バイオチッ プとバイオセンサ	·	東京都		$1\sim65$ $139\sim17$ $3$
					·		

## 雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
R.Ogawa, H.Ogawa, A.Oki, S.Hashioka, Y.Horiike	Fabrication of nano-pillar chi ps by a plasma etching tech nique for fast DNA separatio n		515	5167-5171	2006
Noritake.Kaji Ryo Ogawa Akio Oki Yasuhiro.Horiike Manabu Tokeshi Yoshinobu Baba	Study of water properties in nanospace	Anal Bioanal Chem	386	759~764	2006
堀池靖浩 甲田裕子 小川洋輝 長井政雄		ナノテクノロ ジーとバイオ センサ 各論 Ⅲ. マイクロチ ップ分析関連	2号增刊	1557-1565	2006
	Midro-Resistance Spot Weldi ng of Nickel Free Austenitic Stainless Steel		539-543	4081-4086	2007
黒田大介	Niフリーステンレス鋼	金属	77	148-154	2007

#### 学会発表

于云光	rax	<del></del>	<del></del>		<del></del>	<del>,</del>	<del>, , , , , , , , , , , , , , , , , , , </del>
種別	著者	発表題目	会議名	開催期間	開催	発表誌名	ページ
					地		
口頭	黒田大介	窒素により高剛	日本高専学会第	2006/08/19 -	神戸	講演論文集	55-56
発表	檜原高明	性化した無痛針	12回年会講演	2006/08/20			
	黒田秀治	の機械的特性	슾				
	   藤原昌樹						
	堀池靖浩						
口頭	小川涼	矩形配列ナノビ	2006年秋季 第67	2006/08/28 -	滋賀	講演予稿集	31
発表	加地範匡	ラーによる DNA	回応用物理学会	2006/09/01			
	若尾創	慣性半径に基づ	学術講演会		:		
	橋岡真義	く DNA サイズ分	re Aria			:	
	馬場嘉信	離効果					
	堀池靖浩						
- the many			and that the	0000 (00 (00	5.2440m	mile yell may real alle	0.
口頭	橋岡真義	マイクロピラー	2006年秋季 第67	2006/08/28 -	滋賀	講演予稿集	31
発表	小川涼	およびハイドロ	回応用物理学会	2006/09/01			
	堀池靖浩	ゲルバルブを利	学術講演会				
		用した DNA 前処					
		理チップの作製	***************************************				
口頭	Ryo Ogawa	DNA Size	The 2006	2006	Yokoh	Extended	870-871
発表	Noritada Kaji	Separation	Onternational		ama	Abstracts	
	Shingi Hashioka	Employing Quartz	Conference on				
	Yoshinobu Baba	Nano-Pillars with	Solid State				
	Yasuhiro Horiike	Different	Devices and				
	-	Allocations	Materials			:	
	3					. 30	A .
口頭	Shingi Hashioka	Integrated DNA	The 2006	2006	Yökoh	Extended	872-873
発表	Ryo Ogawa	Purification and	Onternational		ama	Abstracts	
	Hiroki Ogawa	Detection Device	Conference on				
	Yasuhiro Horiike	for Diagnosis of	Solid State				
-		Infection	Devices and				
		Diseases	Materials				
口頭	堀池靖浩	COLORIMETRIC	μ TAS2006	2006/11/05-	東京	Micro Total	Page 1558
発表	甲田裕子	MEASUREMENT		2006/11/09		Analysis	~1560/
	張嘉顯	CLINICAL CHIP			·	Systems	
	小川涼	FOR HOME MEDICAL			-	2006	
	橋岡真義	DIAGNOSIS	-				
:	長井政雄		-				
				,	: 1	· ·	

							<u> </u>
口頭	小川涼	ナノ構造体を用	第 28 回日本バイ	2006/11/27 -	東京	予稿集	114
発表	加地範匡	いた DNA サイズ	オマテリアル学	2006/11/28			
	若尾創	分離機序の解明	会大会				
	橋岡真義						
	馬場嘉信			-			
	堀池靖浩						:
口頭	橋岡真義	DNA ワンチップ診	第 28 回日本バイ	2006/11/27 -	東京	予稿集	304
発表	小川涼	断のための前処	オマテリアル学	2006/11/28	:		
	堀池靖浩	理デバイスの作	会大会				
		製					
口頭	堀池靖浩	在宅診断用比色	NANOBIO-TOKYO	2006/12/04-	東京	Extended	Page 379~
発表	甲田裕子	測定検診チップ	2006	2006/12/07		Abstract of	380/
	張嘉顯	:				NANOBIO -	
	小川涼					ТОКУО	
	橋岡真義				:	2006	
	長井政雄					and the state of t	
	小川洋輝	:					
口頭	堀池靖浩	ドライ比色法に	第1回ナノバイ	2006/12/21	東京		
発表		よる微量血液分	オテクノロジー				
		析在宅診断チッ	連携群 成果報告				
		プ	会				
口頭	堀池靖浩	ドライ比色法に	萌芽的先端医療	2007/02/13	東京	要旨集	37-39
発表	甲田裕子	よる微量血液分	技術推進研究事				
	張嘉顯	析在宅診断チッ	業に係る研究成		:		
	長井政雄	I I	果発表会				:
	小川洋輝						
口頭	Chang Chia-Hsein	Droplet device	第 54 回応用物理	2007/3/27-	東京	講演予稿集	1371
発表	Hiroki Ogawa	aiming to be used	学関係連合講演	2007/3/30			-
	Hashioka Shingi	for multiple	会				-
	Yasuhiro Horiike	immunoassay					:
-		detection					
口頭	橋岡真義	前処理デバイス	第 54 回応用物理	2007/3/27-	東京	講演予稿集	1371
発表	益一哉	を搭載したナノ	学関係連合講演	2007/3/30			-
	堀池靖浩	ギャップ DNA 診	슾				-
		断チップの作製		·			





Thin Solid Films 515 (2007) 5167-5171



# Fabrication of nano-pillar chips by a plasma etching technique for fast DNA separation

R. Ogawa \*, H. Ogawa, A. Oki, S. Hashioka, Y. Horiike

National Institute for Materials Science (NIMS), Tsukuba, Ibaraki, 365-0044, Japan Available online 27 November 2006

#### Abstract

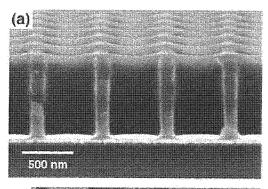
The fabrication of quartz nano-pillars was investigated using dry etching with a Ni mask. The mask diameter increased during etching due to resputtering of the Pt/Cr seed layer. However, once the seed layer had been eroded the enlarged mask diameter did not increase any further. Hence, the use of the mask enabled the fabrication of nano-pillars with a high aspect ratio. In situ FTIR-ATR observation of HF quartz plate pressure bonding developed a new bonding technique involving the use of  $\rm H_2SiF_6$ . The nano-pillar chips allowed then to size-separate DNA of 10 kbp and 38 kbp within 20 s.

© 2006 Elsevier B.V. All rights reserved.

Keywords: Nano-pillars; Quartz bonding; DNA electrophoresis; DNA size separation

#### 1. Introduction

After 100% of the human genome project was deciphered in 2003, studies in genomics are now advancing towards tailormade medical treatments according to individual genome information. This goal requires a new DNA separation technique that is between 108 and 109 times faster than current separation methods such as gel based capillary electrophoresis. In addition, it will be necessary to separate DNA fragments that may be several tens of kilobases in length. Existing techniques such as pulsed-field gel electrophoresis [1-3] suffer from decreased separation resolution as the length of the DNA fragment increases. To overcome these issues, microfluidic devices with nano-structures are being studied as an alternative to gel electrophoresis. For example, Craighead et al. reported a technique for the separation of circular (M13) and linear lambda DNA [4] employing nano-pillars, and the device showed the function as a molecular sieve. Also, the size-separation of DNA [5-7] was reported by Craighead et al., based on entropy trapping employing microfabricated nano-structures. Those devices for DNA separation were fabricated using lithographic techniques. Arrays of self-assembled magnetic bead columns were also investigated and used to separate DNA fragments of tens of kilo base pairs (kbp) [8,9].



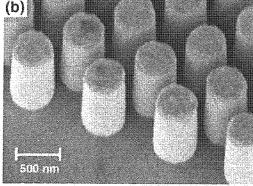


Fig. 1. (a) Cross-sectional SEM picture of the resist hole pattern and (b) of the Ni posts after removal of the resist, viewed at an angle of about 45°.

<sup>\*</sup> Corresponding author.

E-mail address: Ogawa.ryo@nims.go.jp (R. Ogawa).

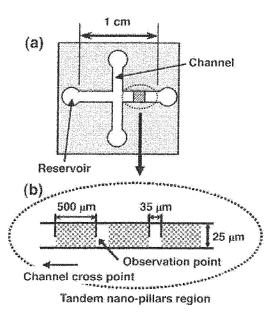


Fig. 2. (a) Schematic of the channel layout and (b) enlarged view of the separation channel, showing regions with and without nano-pillars.

Previously, we demonstrated the electrophoretic separation of DNA in a microchannel containing an array of nano-pillars. With this technique, we were able to reduce the time required

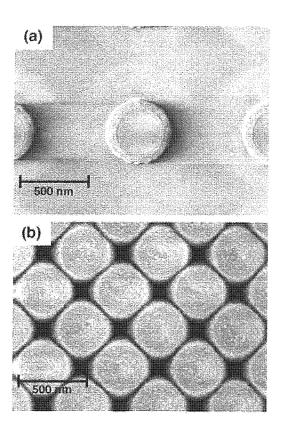


Fig. 3. SEM pictures of quartz nano-pillar patterns after one minute of etching, where the center-to-center distance of the Ni mask was (a) 1  $\mu$ m and (b) 600 nm. The initial diameter of the Ni masks was 450 nm.

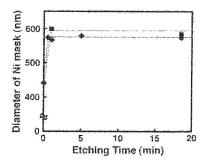


Fig. 4. Ni mask diameter changing with time for a center-to-center distance of 600 nm (Φ) and those of 1 μm (■).

for the separation of T4-DNA (166 kbp) and λDNA (48.5 kbp) from half a day for conventional gel electrophoresis to just 25 s [10]. Furthermore, by employing a channel with regions with and without pillars permitted the multi-stage separation of DNA fragments from 100 bp to 1 kbp. The microfluidic devices were fabricated using quartz substrates. The use of quartz prevented dielectric breakdown when applying the high electric fields required for the electrophoretic separation of DNA and also permitted the observation of fluorescently labeled DNA molecules excited using ultraviolet light.

This paper describes the technologies involved in the fabrication of nano-pillars on a quartz plate, and a new bonding technique for quartz plates based on elucidation of the mechanism responsible for 1% HF bonding [11] using FTIR-ATR (Fourier transform Infrared-Attenuated Total Reflection). The separation of DNA using these nano-pillar chips is also reported.

#### 2. Experimental

#### 2.1. Nano-pillar fabrication

A 0.5 mm thick quartz wafer was sputter-coated with a Pt/Cr seed layer. The layer thickness ranged from 50 to 70 nm due to

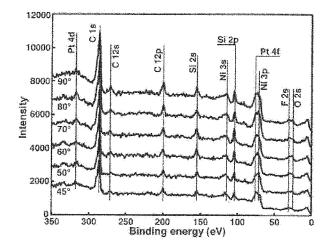


Fig. 5. Angular dependent XPS spectra of a quartz surface with Ni masks after etching for 1 min.

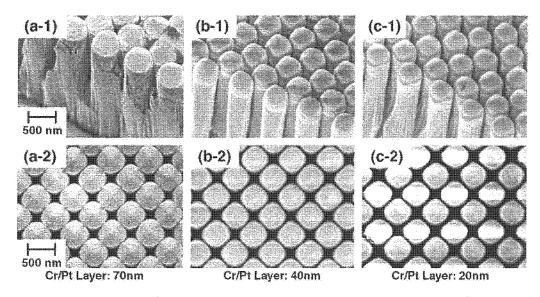


Fig. 6. SEM pictures of nano-pillars formed by the etching of substrates with different Pt/Cr seed layer thicknesses: (a) for 70 nm, (b) for 50 nm and (c) for 20 nm. The top row of figures is viewed at an angle of about 45° while the bottom row of figures is viewed from above.

the instability of our sputter–deposition system. This wafer was then spin coated with an electron beam (EB) resist (ZEP-520A, Nippon Zeon). This resist was patterned with an array of 500 nm diameter holes using EB lithography (ELS-7500, Elionix). Ni was then electroplated into the array of holes left in the resist. The remaining resist was removed, leaving an array of 450 nm diameter Ni pillars (see Fig. 1). The substrate was then etched by employing Neutral Loop Discharge (NLD) [12] with CF<sub>4</sub>. Ni and quartz etch rates were 21.5 nm/min and 238 nm/min, respectively, thus leading to a selectivity of 12 for quartz relative to Ni. After removal of the Ni mask by wet etching, the substrate was pressure bonded to a 130  $\mu$ m thick quartz top plate that had been dipped into H<sub>2</sub>SiF<sub>6</sub>. A pressure of 1 MPa was applied for 12 h at 65 °C.

#### 2.2. DNA electrophoretic separation

A schematic of a fabricated nano-pillar chip with two intersecting channels is shown in Fig. 2(a). Each channel was 1 cm in length, 25 µm in width, and 4 µm in depth. 500 µm long regions of nano-pillars were arranged along the separation channel with a spacing of 35 µm between each region, as shown in Fig. 2(a) and (b). The electrophoretic behavior of individual DNA molecules (T4 DNA, 166 kbp) was observed using a fluorescence microscope with a water immersion lens (see Fig. 10). For these observational experiments, the applied electric field was 25 V/cm. λDNA was digested into 10 kbp and 38 kbp fragments by ApaI. The electrophoretic separation of DNA was investigated by electrically injecting a plug of a sample containing ApaI digested fragments into the separation channel of a nano-pillar chip. The DNA fragments were 10 kbp and 38 kbp in length, and the electric field in the separation channel was 100 V/cm. The fluorescent intensity of DNA labeled with YOYO-1 was observed at a point 500 µm downstream from the last nano-pillar region.

#### 3. Results and discussion

#### 3.1. Increase in diameter of Ni pillars after etching

Fig. 3(a) and (b) show overhead views of quartz pillar patterns after etching for 1 min using Ni masks with an original diameter of 450 nm, where center-to-center distances of the Ni masks for (a) and (b) were 1  $\mu$ m and 600 nm, respectively. The diameter of the quartz pillars in (a) increased to 600 nm. The pillars in (b) formed a pseudo-square shape with a side-to-side width of 520 nm and a diagonal width of 690 nm. In this paper, the inter-pillar gap is defined as the nearest distance between pillars. For example, a center-to-center distance of 600 nm with 500 nm diameter pillars corresponds to a 100 nm gap. Thus in case (b), the gap for the side-to-side direction was about 30 nm.

In order to investigate the origin of the increase in diameter of the quartz pillars after etching, the time-dependent variation of Ni mask diameter was measured for both (a) and (b) as shown in Fig. 4. For case (a), within 1 min, the diameter of the Ni

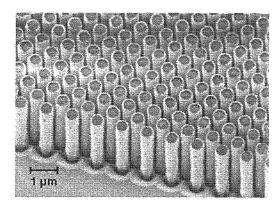


Fig. 7. SEM picture of nano-pillars with a diameter of 500 nm, an inter-pillar gap of 100 nm, and an aspect ratio of 8.

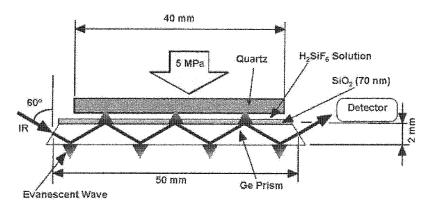


Fig. 8. Schematic cross section of the specimen used for in situ FTIR-ATR observation of the pressure bonding process,

pillars increased to 600 nm, and in case (b), within 1 min, the side-to-side width increased to 570 nm. Subsequently they did not increase any further. It is revealed that the increase of diameter in Ni pillar led the diameter of quartz pillar to increase. The entire surface including pillars was analyzed using XPS (Xray photoelectron spectroscopy, Quantera, PHI), Fig. 5 shows the result of an angular-dependent XPS measurement, where specimen angles were changed from 45° to 90°. Spectra were acquired from substrates that had been etched for 5 min. Peaks corresponding to carbon/fluorine and Ni originating from the etching gas and the mask were clearly detected. Although no significant differences between angular-dependent spectra were observed, the peak at 315 eV was evaluated to result from the 4d orbital of Pt. Hence it is likely that the surface of the Ni mask is covered with the sputtered Pt-Cr seed layer. Peaks from Cr could not be detected because the strong peaks of Cr overlapped with the peaks of oxygen. These results demonstrate that the sputtered Pt-Cr film re-attaches to the sidewalls of the Ni mask in the initial stage of quartz etching. Once the Pt/Cr seed layer has been eroded, there is no more material available for reattachment and the mask diameters do not change any more (Fig. 4). Therefore the thickness of the Pt/Cr seed layer was altered to see what effect that would have on the morphology of the etched pillars as shown in Fig. 6. When the thickness of the Pt/Cr seed layer was 70 nm, adjacent Ni masks almost overlapped with each other after etching due to re-attachment.

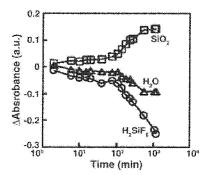


Fig. 9. FTIR-ATR absorbance changes of: SiO<sub>2</sub> (1070 cm<sup>-1</sup>,  $\square$ ), H<sub>2</sub>O (1650 cm<sup>-1</sup>,  $\Delta$ ) and H<sub>2</sub>SiF<sub>6</sub> (739 cm<sup>-1</sup>, O).

However, the gaps between Ni masks after etching did not disappear for Pt/Cr seed layer thicknesses of 50 nm and 20 nm. Hence, by using a thinner seed layer, a regular array of high aspect ratio quartz nano-pillars could be fabricated, as shown in Fig. 7 for 500 nm pillars with a 100 nm gap and an aspect ratio of 8.

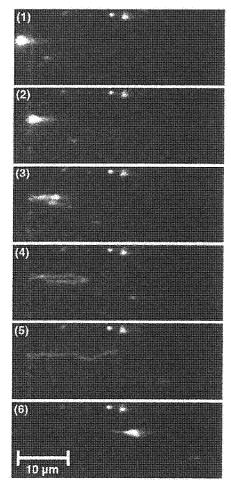


Fig. 10. A series of photographs of the single molecule electrophoretic behavior of T4 DNA (166 kbp) in the nano-pillar chip.

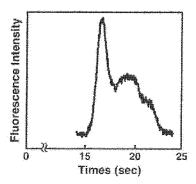


Fig. 11. Electropherogram of the separation of 10 kbp and 38 kbp DNA in the nano-pillar chip.

#### 3.2. Quartz bonding using H<sub>2</sub>SiF<sub>6</sub>

Fracturing of the quartz plates was often encountered when employing 1% HF dipping and subsequent pressure bonding at 1.3 MPa [11] to bond the 130 µm thick quartz cover plate onto the patterned substrate. In order to improve this bonding technique we investigated the mechanism responsible for bonding. We prepared a FTIR-ATR (Fourier Transform Infrared-Attenuated Total Reflection) system as shown in Fig. 8, in which a SiO<sub>2</sub> layer of 70 nm thickness was sputter-deposited onto the surface of a Ge prism. A quartz plate was dipped in 10% HF and then pressed onto the SiO<sub>2</sub>/Ge surface at 5 MPa. Time-dependent changes of absorbance due to the formation of products were investigated. The results revealed clearly that the interface of the quartz plates was first etched by the HF solution, thereby producing H<sub>2</sub>O and H<sub>2</sub>SiF<sub>6</sub> as products. Subsequently, SiO<sub>2</sub> was formed at the interface as a result of H<sub>2</sub>O and SiF<sub>4</sub> elimination. During measurements, we noted the growth and then diminution of the H<sub>2</sub>SiF<sub>6</sub> adsorption peak. It occurred to us that since the H<sub>2</sub>SiF<sub>6</sub> was responsible for SiO<sub>2</sub> formation at the interface, then H<sub>2</sub>SiF<sub>6</sub> could be utilized directly as a bonding agent. Fig. 9 shows time-dependent changes of the SiO<sub>2</sub>, H<sub>2</sub>O and H<sub>2</sub>SiF<sub>6</sub> absorption peaks. Both H<sub>2</sub>O and H<sub>2</sub>SiF<sub>6</sub> peaks decreased as the amount of SiO2 increased. Based on these results, a quartz plate was dipped in H2SiF6 solution and then placed in contact with another quartz plate. A satisfactory bond was achieved when these plates were subjected to a pressure of 1 MPa at 65 °C for 12 h. These conditions were milder than those required for the 1% HF dipping technique.

#### 3.3. DNA size separation

The single molecule behavior of T4 DNA (166 kbp) in the nano-pillar regions was observed and this is shown in Fig. 10. DNA underwent repeated cycles of shrinking, stretching, and hooking. The DNA fragments did not follow a straight path and often changed direction. This behavior suggests that the nano-pillars play a role that is analogous to the sieving effect that occurs when using a polymer matrix in gel electrophoresis. The electrophoretic speed of the DNA fragments in the pillar-covered regions

was 31.4  $\mu$ m/s. The separation of 10 kbp and 38 kbp DNA fragments obtained from ApaI digested  $\lambda$ DNA was investigated using a nano-pillar chip with a pillar gap of 100 nm. An electropherogram of this separation is shown in Fig. 11. Two peaks can be observed, indicating the successful separation of 10 and 38 kbp DNA within 20 s.

#### 4. Conclusions

Nano-pillars were fabricated by dry etching using a Ni mask. The mask diameter increased from 450 nm to 570 nm during the etching process. This was caused by reattachment due to sputtering of the Pr/Cr seed layer on the quartz plate substrate. The growth of the Ni mask stopped once the seed layer had been eroded by the etching process and thus nano-pillars with high aspect ratios could be fabricated. An investigation of the quartz HF dip-bonding mechanism with in situ FTIR-ATR led to the development of a more effective bonding method involving the use of H<sub>2</sub>SiF<sub>6</sub>. The nano-pillar chip fabricated using these technologies allowed us to separate 10 kbp and 38 kbp DNA fragments within 20 s.

#### Acknowledgements

The authors would like to express our great thanks to Dr. Alexander Iles of the National Institute for Materials Science who corrected carefully English.

This research was partially supported by the Ministry of Education, Science, Sports and Culture, Grant-in-Aid for Young Scientists (B), 17750078 6822, 2005 and the Advance Nano-Bio Device Project (P03011) supported by NEDO (New Energy and Industrial Technology Development Organization).

XPS analysis was supported by the Material Analysis Station of the National Institute for Materials Science.

#### References

- M. Lalande, J. Noolandi, C. Turmel, J. Rousseau, G.W. Slater, Proc. Natl. Acad. Sci. U. S. A. 84 (1987) 8011.
- [2] G.W. Slater, J. Noolandi, J. Rousseau, C. Turmel, M. Lalande, Biophys. J. 53 (1988) A475.
- [3] C. Turmel, E. Brassard, G.W. Slater, J. Noolandi, Nucleic Acids Res. 18 (1990) 569.
- [4] S.W. Turner, A.M. Perez, A. Lopez, H.G. Craighead, J. Vac. Sci. Technol., B 16 (1998) 3835.
- [5] J. Han, S.W. Turner, H.G. Craighead, Phys. Rev. Lett. 83 (1999) 1688.
- [6] J. Han, H.G. Craighead, Science 288 (2000) 1026.
- [7] J. Han, H.G. Craighead, Anal. Chem. 74 (2002) 394.
- [8] P.S. Doyle, J. Bibette, A. Bancaud, J.-L. Viovy, Science 295 (2002) 2237.
- [9] N. Minc, C. Fütterer, K. Dorfman, A. Bancaud, C. Gosse, C. Goubault, J.-L. Viovy, Anal. Chem. 76 (2004) 3770.
- [10] N. Kaji, Y. Tezuka, Y. Takamura, M. Ueda, T. Nishimoto, H. Nakanishi, Y. Horiike, Y. Baba, Anal. Chem. 76 (2004) 15.
- [11] H. Nakanishi, T. Nishimoto, M. Kanai, T. Saitoh, R. Nakamura, T. Yoshida, S. Shoji, Sens. Actuators 83 (2000) 136.
- [12] Y. Chinzei, M. Ogata, H. Shindo, T. Ichiki, Y. Horiike, J. Vac. Sci. Technol., A 16 (1998) 1519.

#### ORIGINAL PAPER

Noritada Kaji · Ryo Ogawa · Akio Oki · Yasuhiro Horiike · Manabu Tokeshi · Yoshinobu Baba

## Study of water properties in nanospace

Received: 27 January 2006 / Revised: 3 April 2006 / Accepted: 5 April 2006 / Published online: 25 May 2006 © Springer-Verlag 2006

Abstract Here we report an anomalous behavior of water, especially its viscosity and hydrodynamic flow, in a nanometer-confined space. As a typical model of a nanometer-confined space, the nanopillar chip, which was developed for DNA size-based separation was used, and single-particle tracking (SPT) technique was applied to investigate water viscosity and hydrodynamic flow in the nanopillar chip. The diffusion coefficients of nanospheres were almost one-third of the theoretical value derived from the Stokes-Einstein equation. This result gave indirect proof that water viscosity in a nanometer-confined space is higher than in a bulk solution. In order to improve resolution and throughput of the nanopillar chip for DNA separation, these potential factors affecting performance should be seriously considered.

**Keywords** Diffusion coefficient · Nanospace · Nanoparticles · Single-particle tracking · Nanopillar chip

**Abbreviations** SPT: Single-particle tracking · ICP: Inductively coupled plasma

N. Kaji (M) · M. Tokeshi · Y. Baba Department of Applied Chemistry, Graduate School of Engineering, Nagoya University, Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya 464-8603, Japan e-mail: kaji@apchem.nagoya-u.ac.jp Tel.: +81-52-7894611

Fax: +81-52-7894666

R. Ogawa · A. Oki · Y. Horiike Nanomaterials Laboratories, National Institute for Materials Science, 1-1, Namiki, Tsukuba 305-0044, Japan

Y. Baba Health Technology Research Center, National Institute of Advanced Industrial Science and Technology, Hayashi-cho 2217-14, Takamatsu 761-0395, Japan



Noritada Kaji is Assistant Professor in the Department of Applied Chemistry at Nagoya University. His current research interests are mainly divided into three parts: nano-biodevices for DNA analysis, single molecule biophysics, and biological process on μTAS.

#### Introduction

Nanotechnologies, especially top-down approaches to construct nanometer-sized structures, have made it possible to fabricate sub-micrometer-sized channels and structures on silicon and quartz substrate. Now the sub-micrometer channels and structures are available for not only mechanical and electrical engineers but also analytical chemists. Nanospace, more precisely sub-micrometer space, is a quite interesting space especially for biophysicists because most biomolecules are nanometer-sized and are expected to show novel physical effects in nanospace [1-5]. What is more, a variety of studies of the physicochemical properties of liquids confined in nanospace have been performed, and it is indicated that liquid properties change in nanospace as compared with bulk. Tas et al. determined the negative pressure in nanochannels from the liquid meniscus [6] and Liu et al. gave an insight into unique properties in a confined liquid through the measurement of ion transport [7] and proton conductivity [8]. Tsukahara et al. proposed water structures in nanochannels based on NMR study [9, 10] and Hibara et al. investigated liquid viscosity and conductance in nanochannels by time-resolved fluorescence measurements [11]. Water confined in carbon nanotubes, which give an ultimately confined nanospace, has also been extensively studied experimentally [12, 13] and computationally [14]. These changes in liquid properties are of great interest in basic science. In order to develop our DNA separation method using the nanopillar chips, several investigations into hydrodynamic properties in nanospace are necessary to improve resolution and throughput. Since the surface area of the nanopillar chip is much larger than simple channel structures, it is readily understood that such a large, charged surface area raises complex electroosmotic flow and adsorption probabilities and may affect the analysis [15].

To investigate the liquid properties, we applied the single-particle tracking (SPT) technique to measure water viscosity in nanospace. A major advantage of the SPT technique is the ability to classify modes of Brownian motion of individual particles. Using this technique, it has been observed that individual membrane proteins or lipids in the plasma membrane of cells show a variety of types of motion, such as normal diffusion, directed diffusion, and restricted diffusion [16–18]. This variety of motions has been attributed to the presence of a random energetic trap array with different binding energies. In an ensemble of long-time averages, the mean-square displacement as a function of time revealed characteristics of the motion. Additionally, the slope of a mean-square displacement vs. time plot would give the diffusion coefficient that reflects

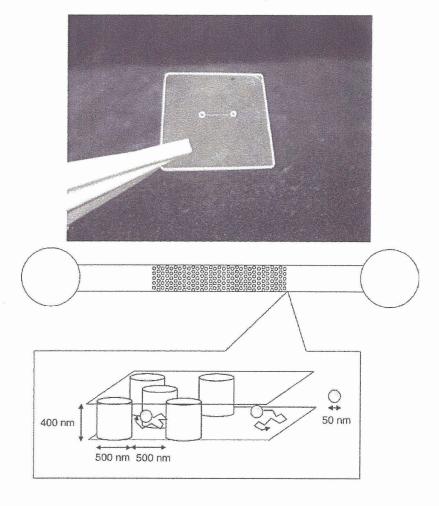
Fig. 1 Schematic representation of the nanopillar chip used for a single-particle tracking (SPT) measurement. The channel width and depth were 50  $\mu$ m and 400 nm, respectively. Nanopillars were placed in the middle section of the channel, and their diameter, spacing and height were 500, 500, and 400 nm, respectively

the ambient viscosity. Taking these advantages into consideration, we applied the SPT technique to measure water viscosity and verify the presence of a hydrodynamic flow in nanospace.

#### **Materials and methods**

Device fabrication and design

The fabrication process of the nanopillar chip used here was the same described in our previous work [19] except the  ${\rm SiO_2}$  dry etching process. In this fabrication process, the quartz plate was etched by  ${\rm Cl_2}$  inductively coupled plasma (ICP). To investigate liquid properties in nanospace using SPT technique, the use of a quasi two-dimensional plane that allows observation of two-dimensional single-particle motion, would be preferable. From this standpoint, a shallow channel is preferable to let the molecules move in a quasi two-dimension plane. In addition, to acquire the precise trajectories without any special optical systems, a shallow channel provides optimum observation space since the focal depth of the high-power objective lens is only a few hundred nanometers, e.g., 150 nm for 100x/1.3 NA



objective lens. In order to observe the trajectories in this shallow channel through a 100x objective lens, a 0.17-mm-thick cover slip is required for the highest image resolution. Considering these points, a 400-nm-deep channel equipped with nanopillars in its middle section was fabricated on quartz substrates as shown in Fig. 1. The nanopillar diameter, spacing, and height used here were 500, 500, and 400 nm, respectively.

#### Single-particle tracking

Fluorescent polystyrene nanospheres with carboxylate groups on their surfaces  $(3.64\times10^{14} \text{ particles/ml}, 50 \text{ nm})$  in diameter, Fluoresbrite YG Carboxylate Microspheres, Polysciences, Warrington, PA) were used as objective particles for measuring trajectory. The size and the  $\zeta$  potential of nanospheres were confirmed by dynamic light scattering (DLS) and electrophoretic light scattering (ELS), respectively, using a dynamic light-scattering spectrophotometer (NICOMP 380/ZLS, Particle Sizing Systems, Santa Barbara, CA). Before the size measurement, the nanospheres were diluted 100-fold in deionized water and sonicated for 15 min to break up aggregates. The nanospheres had a diameter of 50.0±5.5 nm and a  $\zeta$  potential of -44 mV in deionized water.

The chip was rinsed with 1 M HCl, 1 M NaOH and deionized water before use to remove any contaminants on the channel and the pillar surfaces. Owing to the treatment with sodium hydroxide, the minus-charged nanobeads could continue Brownian motion against adsorption on the surfaces. The washing procedure for nanopillar chips is one of the critical problems. In our first attempt, we tried to wash the nanopillar chip with a pressure-driven flow. But due to the infinitesimally small quantity of the solution in the nanopillar chip (~pl) and frangible nanopillars, this washing method seemed to be inappropriate. So we immersed the nanopillar chip in the solutions overnight, and after that, filled and evaporated the solutions in the nanopillar chip three to five times.

The nanospheres were diluted 10,000-fold in deionized water (~18 M $\Omega$ -cm) and sonicated for more than 10 min to break up aggregates and then applied to the reservoir. The water droplet containing nanospheres was put on one of the reservoirs and then was automatically introduced into the channel and the nanopillar region by capillary action. After the introduction of water was confirmed by an optical microscope, the single-particle tracking experiment was begun. The washing method mentioned above

**Table 1** Average diffusion coefficients (n=17) and their standard deviations at four different time intervals

Time intervals (ms)	Channel	Nanopillars		
33	3.18±2.96	1.84±1.38		
66	$3.18\pm2.92$	1.84±1.38		
99	$3.16\pm2.88$	1.84±1.38		
132	$3.15\pm2.84$	1.84±1.37		

was applied to discharge the water from the channel and the nanopillar region. Single-particle trajectories were observed using a 100-W mercury arc lamp-illuminated inverted fluorescence microscope (Axiovert 135TV, Carl Zeiss, Tokyo, Japan) thorough a 100x/1.3 NA objective (Carl Zeiss). Brownian motion of nanospheres was captured by video-rate CCD camera (C7190-43, Hamamatsu Photonics, Hamamatsu, Japan), recorded on DV tape (DSR-11, SONY, Tokyo, Japan), and transferred to a computer. The centers of mass of fluorescent spots were analyzed and traced with image-processing software (Cosmos32, Library, Tokyo, Japan). All SPT measurement was done at 25 °C.

#### Results and discussion

Calibration of single-particle tracking

Quasi two-dimensional Brownian motion of nanospheres was traced from the sequential video images. The displacement of *i*th particle at time t,  $\Delta x_i(t) = x_i(t) - x_i(0)$  and  $\Delta y_i(t) = y_i(t) - y_i(0)$ , gives the square displacement according to the following equation:

$$\left[\Delta R_i(t)\right]^2 = \left[\Delta x_i(t)\right]^2 + \left[\Delta y_i(t)\right]^2 \tag{1}$$

To obtain a diffusion coefficient, mean-square displacements  $\langle R^2 \rangle$  should be calculated as a function of time:

$$\langle R^2 \rangle = \frac{1}{N} \sum_{i=1}^{N} \left[ \Delta R_i(t) \right]^2 \tag{2}$$

where N is the total number of frames that have been traced (over 600 frames in this case). When the nanospheres undergo normal diffusion, the slope of the  $\langle R^2 \rangle - \Delta t$  plot should be linear and  $\langle R^2 \rangle$  can be expressed as follows:

$$\left\langle R_{x}^{2}\right\rangle =2D_{x}t\quad \left\langle R_{y}^{2}\right\rangle =2D_{y}t$$
 (3)

$$\left\langle R^2 \right\rangle = \left\langle R_x^2 \right\rangle + \left\langle R_y^2 \right\rangle \tag{4}$$

$$2D_x t + 2D_y t = 4Dt (5)$$

where D is the two-dimensional diffusion coefficient and  $D_x$  and  $D_y$  are one-dimensional diffusion coefficients for the x and y directions, respectively. Therefore, we could calculate the diffusion coefficient from the slope of the plot of  $\langle R^2 \rangle - \Delta t$ . While the diffusion coefficient can be obtained experimentally as mentioned above, the Stokes-Einstein equation also provides the diffusion coefficient of

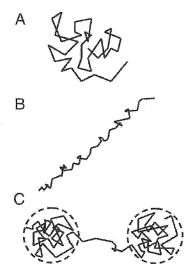
a small particle based on thermodynamic and hydrodynamic views on diffusion. The equation is given by:

$$D = \frac{k_B T}{6\pi \eta r} \tag{6}$$

where  $k_B$  is Boltzmann's constant, T is the absolute temperature,  $\eta$  is the viscosity of the fluid and r is the radius of the diffusing particle. Comparing the diffusion coefficients obtained from Eqs. (5) and (6), we can estimate the differences in viscosity between bulk space and nanospace.

In membrane dynamic studies using SPT technique, as Kusumi et al. mentioned [18], the diffusion coefficient determined by SPT could provide the diffusion rate within membrane compartments that are only submicrometersized. Thus the authors refer to the diffusion coefficient estimated from SPT as the "microscopic" diffusion coefficient. In contrast, what we would like to investigate is the viscosity of water in nanospace based on the diffusion coefficient. It is the interactions between the nanospheres and the surrounding water that should be examined, not the nanospheres or the surfaces of the channel and the nanopillars. To prevent this, a lower concentration of nanospheres should be used for SPT measurement in the shortest possible time. In our microscopic observation system, the images were taken every 33 ms at 640×480pixel resolution, with one pixel square being nearly equivalent to 120 nm<sup>2</sup>. Considering the channel height (400 nm) and the spaces between nanopillars (500 nm), in order to validate SPT technique, a diffusion coefficient was first calculated by fitting the  $\langle R^2 \rangle$  at time intervals of 33, 66, 99 and 132 ms over the whole observation time (20-30 s). The results are shown in Table 1. Differences between the means of the diffusion coefficients at each time interval were assessed with t-test. The diffusion coefficients did not change significantly in these time intervals. The averaged diffusion coefficients and their standard deviations show no significant differences among these time intervals. Though longer trajectory measure-

Fig. 2 Diagram of typical trajectories of different modes of motion: a simple diffusion, b directed motion, e.g., flowing beads under a hydrodynamic flow, and e confined motion, e.g., membrane proteins on the cell surface. d The relationship between the mean-square displacement  $\langle r^2 \rangle$  and time t under various diffusion motions. This figure was reprinted, with permission, from the Annual Review of Biomolecular Structure, Volume 26 (c) 1997 by Annual Reviews http://www.annual reviews.org

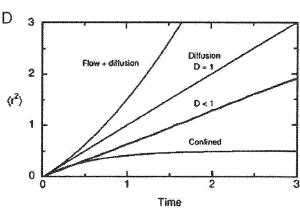


ments are preferable to reduce the statistical errors yielded in the process of image analysis, trajectory measurements below 400 or 500 nm are preferred to exclude other factors that might influence a nanosphere's motion. Considering these points, diffusion coefficients at 132-ms time intervals were assumed to reflect the actual value.

#### Diffusion coefficients in nanospace

The diffusion coefficients at 132-ms time intervals were measured for 17 different particles over 20 s, and the diffusion coefficients of  $D_{channel}=3.15 \mu m^2/s$  in the nanochannels and  $D_{\text{nanopillars}}=1.84 \,\mu\text{m}^2/\text{s}$  in the nanopillars were obtained from the slope. These values could not be simply compared because geometrical differences, especially the area occupied by the 500-nm wide nanopillar itself and a difference in the interfacial area ratios, were not factors in the calculation. Although there was little difference between the interfacial area ratio in the nanochannel and the nanopillars (50×50 µm region, 5,040  $\mu m^2/1,000$   $\mu m^3$  in the nanochannel and 5,630  $\mu m^2/1,000$   $\mu m^3$  in the nanopillars), the degrees of freedom of possible trajectory in the nanopillars are obviously lower than in the nanochannels. Despite the differences in the degrees of freedom, we calculated the diffusion coefficients on the assumption that the nanopillars have zero volume but the same electrostatic properties as quartz.

Diffusion coefficients could be also estimated from Eq. (6), and the calculated value was  $D_{\rm theory}$ =9.81  $\mu m^2/s$  at 25 °C. Even if we could not simply compare the  $D_{\rm channel}$  with the  $D_{\rm nanopillars}$ , both of them are obviously smaller than the  $D_{\rm theory}$ . The smaller diffusion coefficient suggested higher viscosity in the nanometer-high channels and the nanopillars. In keeping with the suggestions of Hibara et al. in their liquid introduction experiment [15], our SPT measurement also suggested that the viscosity of the liquid became higher in nanospace.



#### Classification of modes of motion

While the SPT measurement over a short time period reflects a diffusion coefficient in microscopic surroundings, a long-time trajectory measurement over a few seconds gives several modes of motion of individual molecules: immobile, directed, confined, tethered, normal diffusion, and anomalous diffusion (Fig. 2) [16–18]. In the present study, the long-time observation of nanosphere motions and a classification of their motions would suggest the presence of a hydrodynamic flow under a geometrical confinement. Due to the simple geometry of the nanochannel and the nanopillars, the motions of nanospheres are expected to be classified into fewer modes than those observed in membrane dynamic studies. The main objec-

tive in this study was to investigate liquid properties in nanospace as well as the presence of a hydrodynamic flow in the nanochannel. In a microchip electrophoresis system without using polymer matrices, a difference in fluid level between the reservoirs generates a hydrodynamic flow and affects the resolution or the reproducibility of the separation. Nano-sized channels or nano-sized pillars, which had been suggested to increase the microscopic liquid viscosity, were expected to hold liquids tightly in their structures and prevent a hydrodynamic flow. In our previous study on DNA separation using nanopillar chips [19], it was practically impossible to detect a hydrodynamic flow in the nanopillar chips during DNA separation.

In this study, we classified the motion of nanospheres into the following three modes: simple diffusion, directed diffu-

Fig. 3 Typical trajectories of nanospheres (a, c, e) and the corresponding plots (b, d, f). Based on the result of least-square fitting, plots were classified into three modes of motion: b simple diffusion, d directed diffusion, and f others

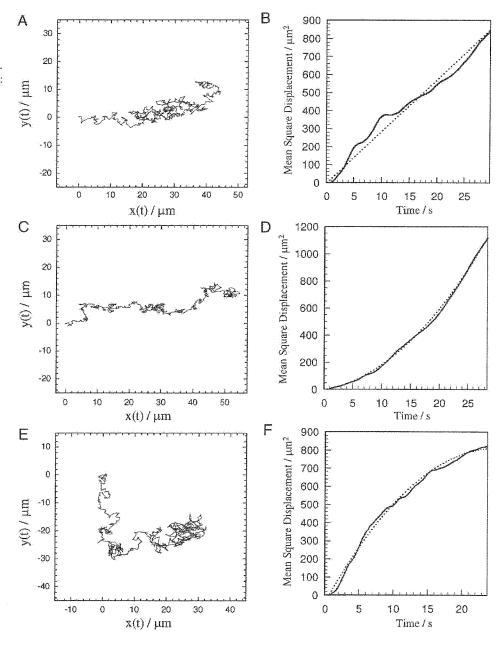


Table 2 The number of classified nanospheres with the percentage of total amount in parentheses

	Channel	Nanopillars	
Simple diffusion	7 (41%)	9 (53%)	
Directed diffusion	7 (41%)	4 (24%)	
Others	3 (18%)	4 (24%)	

sion, which implies the presence of hydrodynamic flow, and others. Fitting of  $\langle R^2 \rangle - \Delta t$  was carried out by Levenberg-Marquardt method, and motions were classified based on the correlation factors. Figure 3 shows a typical trajectory of the nanospheres and their  $\langle R^2 \rangle - \Delta t$  plot. These representative trajectories were drawn by connecting the positions of the nanospheres from the sequential video images. Though the trajectories were complex, the  $\langle R^2 \rangle - \Delta t$  plot showed distinct differences among the modes. A total of 34 nanobeads, in the channel and the nanopillars, were analyzed to classify the motions. Consequently, as shown in Table 2, more directed diffusion was observed in the nanochannel than in the nanopillars. This result indicates that the nanopillars prevent a hydrodynamic flow to some extent even when the adjacent nanochannel has a hydrodynamic flow. Of course the nanopillars were not fully able to prevent the hydrodynamic flow, but relatively speaking, the degree of hydrodynamic flow was smaller than that in the channel. The low reproducibility of the DNA migration time in our previous work could possibly be attributed to the hydrodynamic flow or the different degrees of hydrodynamic flow in the channel and the nanopillars. The coexistence of a different degree of hydrodynamic flow in the nanopillar chips should be considered as one factor for achieving high-resolution DNA separation with an excellent reproducibility.

Acknowledgements The present work was partially supported by a Grant from New Energy and Industrial Technology Development Organization (NEDO) of the Ministry of Economy and a Grant-in-Aid for Scientific Research from the Ministry of Education, Science and Technology, Japan.

#### References

- 1. Turner SW, Cabodi M, Craighead HG (2002) Phys Rev Lett 88:128103
- 2. Han J, Turner SW, Craighead HG (1999) Phys Rev Lett 83:1688-1691
- 3. Han J, Craighead HG (2002) Anal Chem 74:394-401
- 4. Han J, Craighead HG (2000) Science 288:1026-1029
- 5. Cabodi M, Turner SW, Craighead HG (2002) Anal Chem 74:5169-5174
- 6. Tas NR, Mela P, Kramer T, Berenschot JW, van den Berg A (2003) Nano Lett 3:1537-1540
- 7. Pu Q, Yun J, Temkin H, Liu S (2004) Nano Lett 4:1099-1103 8. Liu S, Pu Q, Gao L, Korzeniewski C, Matzke C (2005) Nano Lett 5:1389-1393
- 9. Tsukahara T, Hibara A, Kitamori T (2005) Proc μTAS 2005:1255-1257
- Tsukahara T, Hibara A, Kitamori T (2004) Proc µTAS 2004:189-191
- 11. Hibara A, Saito T, Kim HB, Tokeshi M, Ooi T, Nakao M, Kitamori T (2002) Anal Chem 74:6170-6176
- 12. Ohba T, Kanoh H, Kaneko K (2005) Nano Lett 5:227-230 13. Naguib N, Ye H, Gogotsi Y, Yazicioglu AG, Megaridis CM, Yoshimura M (2004) Nano Lett 4:2237-2243
- 14. Mashl RJ, Joseph S, Aluru NR, Jakobsson E (2003) Nano Lett 3:589-592
- Xu XH, Yeung ES (1997) Science 275:1106-1109
   Saxton MJ, Jacobson K (1997) Annu Rev Biophys Biomol Struct 26:373-399
- Qian H, Sheetz MP, Elson EL (1991) Biophys J 60:910-921
- 18. Kusumi A, Sako Y, Yamamoto M (1993) Biophys J
- 19. Kaji N, Tezuka Y, Takamura Y, Ueda M, Nishimoto T, Nakanishi H, Horiike Y, Baba Y (2004) Anal Chem 76:15-22

## ナノテクノロジーとバイオセンサ

## 各論 Ⅲ. マイクロチップ分析関連

3. 無痛針による微量採血分析から在宅で健康診断できる ヘルスケアチップの開発

堀池 靖浩 甲田 裕子 小川 洋輝 長井 政雄

臨 床 検 査

第50巻 第12号 増刊号 別刷 2006年11月30日 発行

## ■.マイクロチップ分析関連

## 3. 無痛針による微量採血分析から在宅 で健康診断できるヘルスケアチップ の開発

堀池靖浩1)/甲田裕子/小川洋輝2)/長井改雄

[KEYWORDS] 無痛針,在宅診断, µTAS, ヘルスケアチップ、電気化学法、比色法

## はじめに

わが国では近年, 少子高齢化が進行し, 高齢者 が占める医療費のコストの激増が国家予算を圧迫 するとともに, 少子化による労働力の不足により 国力を衰退させることが危惧される。この包括的 解決の一策は、高齢者が働く意欲のある限り働 き、培った知恵と経験を社会に還元できるよう元 気で毎日を送れる「健康立国」を世界に先駆けわ が国に創り出すことである。このためには予防が 大切であり、簡便・迅速なバイオセンシング技術 を早急に確立しなければならない。一方、μTAS (micro total analytical system)や Lab on a Chip<sup>1)</sup>と呼ばれる小面積の基板に異なった分析部 品を機能的に集積化して微量試料を分析する新研 究分野が近年急激に発展し、その出口の1つとし て種々のバイオチップの出現が期待されている。 筆者らはその一貫として、微量の採血から在宅で 簡便・確実に同時多項目を診断できる種々の診断 用 POCT (point-of-care testing) チップを開発し ている。図1にバイオチップ開発の目的とその展 開をまとめたが、種々の診断チップが整うと、計 測された多項目のマーカー値を医療施設に通信回 線で送り、医療ブロードバンドネットワークと高 精細ディスプレイを介して医師による問診が在宅

で可能になる。検出マーカーを増やし、長期間の 使用によって, 医療施設に多数の方の健康・疾病 マーカーの推移が蓄積されたデータベースが構築 され、そのマーカーと疾病との相関関係を解明が 可能になる。 さらには、医師不在の寒村や離島の 人々の遠隔診断が実現される.

本稿では、まず現在商用の各種 POCT 生化学 分析装置を紹介し, 筆者らの在宅検査を目指した 無痛針から採取した微量の血液の電気化学法2)や 比色法3,4)による分析によって健康・疾病マーカ ーを測定するヘルスケアチップを解説する。これ らのバイオチップの製作については拙著5)に譲 り、言及しない。

## 各種 POCT 生化学分析装置の現状

血液採取に基づく POCT 生化学分析装置とし て, 現在, 数社から血液の診断に基づいたバイオ チップが実用化されている。 ランセットと呼ばれ る瞬間に指先を穿刺、採血し、血糖値の1項目だ け調べる血糖値モニターは, 国内外とも多く販売 され、糖尿病患者の POCT に貢献している。一 方,バイオチップとしては、米国のBiosite Triage Cardiac system<sup>6)</sup> は、マイクロ流路を基 にしたデバイスを用いて全血から心臓病マーカー を POC 測定する。Micronics Inc. の「ORCA マ イクロ流路プラットフォーム」は、拡散を基本に した Hフィルターや T-センサーなどのような 種々の圧力駆動型マイクロ流体力学の要素部品を

2) OGAWA Hiroki, NAGAI Masao アドビック(株)

<sup>1)</sup> HORIIKE Yasuhiro, KODA Hiroko 独立行政法人 物質・材料研究機構